慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	デヴィド・ヒユームの奢侈論と其功利主義的倫理
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.1 (1920. 1) ,p.57- 89
JaLC DOI	10.14991/001.19200101-0057
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200101-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

するものと斷ずるの外なし。此場合に其一方の依賴に出づると否との問題は他國の內政に對する不法の干涉たる其構成要件に於て何等の變化を及ぼすものに非ざるが故に日本はコルチャック政府の依賴に依るを口實として不法干涉を行ひつゝありとの非難を免がる可からざるなり。若し夫れボルシエヴイズムの傳播を以て日本の立國的基礎を危殆ならしむるものなりとの理由を云々して西比利亞駐兵を辯護する世間一部の曲論に對しては本文の後段に評論する所ある可し。

デヴィド・ヒユームの奢侈論と功利主義的倫理

高橋誠一郎

一

奢侈に關しては古來全然相反せる二樣の學説あり。一は奢侈を以て、縱令ひ法令を以て禁止せらる可きものと看做さざる迄でも、少くとも經濟學の名に於て痛擊を加へざる可らざるものなりとなし、現存せる財貨並びに利用し得可き生產力には一定の制限存するを以て、少數の富裕者をして其必要以上の欲望を滿足せしむるが爲めに、多數民衆の必要不可缺なる消費を危ふからしむ可きに非ずと論じ、他はあらゆる經濟的進步は悉く皆な奢侈的欲求の形態を取りて現るゝものなるが故に、奢侈は經濟的發達に取りて必要なるものなりと做し、且つ奢侈的消費は勞働の機會を與ふるものなりと主張す。

David Hume が奢侈論上に於ける努力は夙に是等兩説の極端を矯正せんとする

に存したるものなり。彼が奢侈論は其Essays, Moral, Political and Literary. Pt. II 1752. 中に收められたるOf Refinement in the Arts. 中に於て最も善く窺知するを得可し。本論文は一千七百五十二年二月版Political Discourses. (Groseの編成せる版本目錄が「一千七百四十二年版」と記せるは明かに誤謬なる可し。同氏編Essays Moral, Political, and Literary. vol. I. p. 85.)同再版、一千七百五十三—四年版Essays and Treatises on Several Subjects並びに一千七百五十八年版同書新版等はOf Luxuryと題せり。Collection des principaux économistes, 14: Melanges d'économie politique I. 1847. 所載經濟論文集亦た同じくla Luxeと題せり。以上本文中に於ける引用は總て一千八百二十二年版に據る。

Adam Smithが消費貨物に對する課稅を論ずるに當り、此種の貨物を分つて必要品及び奢侈品の二者に分つてより(The Wealth of Nations, bk. v. chap. ii. art. iv.)幾多の定義を產むに至りし「奢侈」なる語は既にHumeによりて意義不確定なるものにして善惡兩樣の意味に解釋せらるゝを得るものなりと說かれたり。そは概ね諸感覺の滿足に於ける大なる精錬を意味す、而して其一定度位は時代、國土若しくは個人の狀態に從つて或ひは無辜と爲り、或ひは非難す可きものと爲る。德と不德との間の限界は他の倫理的事項に於けると等しく爰にも亦た正確に決定せらるゝことと能はず。或る感覺の滿悅其者が一の不德なりと做すは熱情の狂亂に由りて攪亂せらるゝことなき者の決して想像し得ざる所なり。食料、飲料又たは衣料の快美に耽溺するは單に是等のものが寬仁若しくは慈悲の如き一定の德を毀損して追求せらるゝの時に不德と爲り、等しく又た之が爲に或る者が其資產を蕩盡し、自己を窮乏赤貧の境涯に陷らしむるの時、是等のものは痴愚と爲るなり。(Of Refinement in the Arts, pp. 253-4.)。總ての個人的奢侈が先づ純然たる感覺的享樂に發するは近世の經濟學者も亦た之を認むる所にして(Sombart, Luxus und Kapitalismus. 1913. S. 72.—Studien zur Entwicklungsgeschichte des modernen Kapitalisums. Bd. I.)而して其本質上關係的概念たるを認め(Roscher, Grunlagen der Nationalökonomie. 1897. S. 662.—System der Volkswirthschaft. B. I.)又た精錬(raffinement)を以て其必要條件と看做し併せて之に善惡二種のもの(le bon ou le mauvais luxe)あるを認むるに於て亦た其後繼者を有するものなり(Cauwes, Cours d'Economie Politique, I. 1893. p. 663.)。

然るに一方に於て放縱主義の人々は不德なる奢侈に對してさへ稱讃を與へ、之

を以て社會に取りて頗る有利なるものなりと做し、而して他方に於て嚴格なる道德家は最も無害なる奢侈をすら非難し、之を以て國家に對して發生す可きあらゆる腐敗、紊亂及び叛亂の淵源なりと看做すなり。是に於て乎、Humeは先づ第一に精錬の時代は又た最も幸福にして最も有德なるを立證し、第二に奢侈にして無辜たらざるに至りたる所に於ては常に亦た有利ならざるに至るものにして、一定の度位を越えて進まんか、縱令び恐らくは其最大なるものに非ずとするも亦た有害なる性質を有するを闡明し、以て是等の兩極端を矯正せんと努めたるなり（同 pp. 254-5.）。

二

Humeは先づ第一の點を立證するが爲めには單に私的及び公的生活の兩者に對する精錬の效果を考察するを以て足れりと做せり。斯くて彼は行爲、快樂及び無爲の三者が人間幸福の構成要素たるより說き起して（三田學會雜誌第十三卷第十二號所載拙稿「デヴィド・ヒュームの經濟學說」（二）參照）、工業的技術を社會より排除せんか、人間は乃ち行爲及び快樂の兩者を剝奪せらるゝものにして、之に代つて無爲以外に何者をも殘すことなきが故に、亦た無爲其者の好感をすら破壞するに至る可し。即ちそは勞働の後に來り、過度の勤勉及び勞苦に由りて消耗し果てたる氣力を回復する場合を除きては決して快適なるものに非ざるが故なり。他に工業及び器械的技術に於ける精錬の利益として觀る可きは是等のものが一般に高等學藝に於ける一定の精錬を生ずるに在り。即ち一方のものは他によりて或る程度まで隨伴せらるゝことなくんば完成の域に到達すること能はず。偉大なる哲學者及び政治家、高名なる將軍及び詩人を產したると同一の時代は常に精妙なる織匠及び船匠に富めるものなり。吾人は星學を知ることなく、若しくは倫理學の等閑視せられたる一國に於て一片の毛布が完全に製作せらる可きことを合理的に期待する能はず。時代の精神はあらゆる技術に影響す、而して人間の心意は一度び其昏睡狀態より覺醒せしめられ、激動中に投ぜられたるが爲めに、あらゆる方面に向ひ、あらゆる學問藝術に改良を加ふるに至るなり。深大なる無知文盲は悉く驅除せられて、人々は行動するを等しく思索し、肉體の快樂と共に精神のそれをも敎養す可き合理的動物の特權を享有するなり。（同 pp. 255-6.）

是等精錬せる技術の發達愈々大なれば、人間は益々社交的と爲る。即ち學識豐富にして、會話の資料を有する時は彼等は孤獨を維持し若しくは無知野蠻なる國民に特有なる疎々たる態度を以て其同國人と生活すること能はざるなり。斯くて彼等は其知識及び高等文藝より受けたる改善の外、相俱に會談し、相互の快樂に寄與するの慣習其者よりして勢ひ人情(Humanity)の增加を感ぜざるを得ざるなり。是に於て乎、工業、知識及び人情の三者は分離し難き鏈鎖によりて相共に連結せられ、理性と等しく經驗よりするも亦た。一層優雅なる(而して普通の用語に從へば)、一層豪奢なる時代に特有なるを發見せらるゝなり。這般の利益は又た是等のものに對して一定の比率を有する不利益によりて隨伴せらるゝことなし。人々が愈々快樂に就きて精錬するや、彼等はあらゆる種類の無節制に陷ること益々少きに至る可し、何となれば斯くの如き無節制に增して眞の快樂を破壞すること大なるものあらざるが故なり。若し放縱なる戀愛若しくは不貞の如きすら優雅なる時代に行はるゝこと多しとするも、而も他方に於て更に忌まはしく、更に心身に取りて有害なる惡習たる酩酊を見ること遙かに稀有なるの事實を發見せざるを得ず。Hume は此點に於て曾だに Ovid 又たは Petronius の徒のみならず、Seneca 若しくは Cato の如き嚴肅なる人々にすら訴へ得可きものなりと做せり。即ち其艶書によりて自己の姉妹 Servilia との情事を發見したる Cato が憤怒の餘り Caesar を罵りて「のんだくれ」と呼びたるに徵しても、大酒が私通より醜陋なるを知る可きなりと(同 pp. 256-8)。

三

然れども工業、知識及び人情の三者は曾だに私的生活に取りてのみ有利なるに非ず。是等のものは其有利なる效果を社會に普及し、宛も私人をして幸福繁榮ならしむると等しく國家をして盛大隆昌に赴かしむるものなり。人生の文飾及び快樂に資す可きあらゆる財貨の增加及び消費は社會に取りて有利なるものなり、何となれば彼等は個人に對する此種の無害なる滿足を增加すると同時に、國家の危急に際しては公務に轉向せしめらる可き一種の勞働「倉庫」たるが故なり。這般の贅物に對し何等の需要存せざる國家に在りては人民は懶惰に沈み、有らゆる生活の快樂を喪ひ、而して國家に取りて無用たる可く、國家は斯くの如く怠惰なる國

民の勤勉よりして其艦隊及び軍隊を維持すること能はざるなり。現在に於ける歐洲諸國の領土は二百年以前と殆ど同一なるも、而も是等諸王國の國力と國威とに至りては甚大なる相違あり。而してそは技術及び工業の發達以外何物にも歸すること能はざるなり。(p. 258.)。

這般の工業は技術及び精錬の時代より不可分なる知識によりて著しく振興せしめらる可く、他方に於て又た這般の知識は國家をして最も善く其人民の勤勉を利用するを得せしむるなり。法規、制度、警保、紀律、是等のものは人間の理性が實習に依り且つ少くとも商工業の更に卑近なる技術に對する精勵に依りて自己を精錬する以前に於ては決して完成の一定度位に到達すること能はざるなり。吾人は紡績車を製造し、若しくは織機を有利に使用することを知らざる人民が善く政府を構成す可きを期待すること能はず。統治の技術に於ける知識は臣民を驅つて叛亂に赴かしめ、有らゆる宥恕の希望を斷つに由りて再び、之を歸順せしむるを不可能ならしむる峻嚴苛刻に比し、仁慈の原則の利益大なることを人民に敎ゆるに由りて自然に靜穩中和を生ずるなり。人々の知識が進歩すると等しく、其性質の溫和と爲りたる時、這般の人情は猶ほ一層顯然として現るゝものにして、そは實に殘忍蒙昧の時代より開明の時代を區別する主要なる特徵たるものなり。是に於て軋轢は其强暴を減じ、革命は其慘劇を少なからしめ、權威は其峻酷を和げ、而して叛亂は其頻發を防ぐなり。國際間の戰爭と雖も、其兇猛性を減じ、而して名譽と利益とが人々をして恐怖並びに憐憫に對して無感覺ならしむる戰鬪果つるや、交戰者は自己を野獸より奪ひて、再び人間たらしむるに至るなり(同 p. 259.)。

而も吾人は人民が其殘忍性を喪失するに由りて彼等が武勇の精神を滅失し、若しくは彼等の國家又たは其自由を擁護するに於て敢爲活潑の程度を減ずるに至る可きを恐るゝの要なし。技術は毫も心身を脆弱ならしむるが如き結果を有するものに非ず。却つて其不可離の隨伴者たる工業は之に新たなる力を加ふるなり。而して若し勇氣の「砥石」と稱せらるゝ忿怒が慇懃と優雅とに由りて幾分其粗鄙を失ふものとせば、更らに强大、更らに不變にして又た更らに制御し得可き元質たる名譽心はかの知識と善良なる敎育とより發する才能の高上によりて新たなる氣力を取得するなり。之に加ふるにかの勇氣と雖も、野蠻人の間に見出さるゝ

こと稀なる紀律と軍事的熟練とによりて伴はるゝことなき時は、毫も持久することなく、又た何等の效用をも有すること能ばざるなり。斯くて Hume は古羅馬の昔より歐洲諸國の今に亘りて例證を求め、通俗の解釋を排して自說を確保するに努めたり。(同 pp. 259-262.)。

彼は更に論鋒を進めて技術の進步は自由よりも寧ろ歡迎す可きものにして、縱し自由制を生ぜざる迄でも、之を維持す可き自然的傾向を有するものなることを力說せんとせり。技術の等閑視せられたる粗野なる國家に在りては、總ての勞働は土地の耕作に使用せられ、而して全社會は土地の所有者及び彼等の臣隸又たは借地人の二階級に分割せらる。後者は必然從屬的のものにして隸屬服從に適し、殊に技術の等閑視せられたる場合に於て常に然らざるを得ざるが如く、彼等が富を所有することなく、又た農事に關する其知識に由りて尊重せらるることなき所に於て然るを見るなり。前者は自ら昂然小暴君の地位に居り、而して平和と秩序との爲めに一の專制君主に服從せざるを得ざるか、若しくは彼等にして古代の貴族の如く其獨立を保持せんと欲せば、彼等自身の間に確執鬪爭を釀し、全社會をして恐らくは最も專制的なる政府よりも更らに惡虐なる混亂裡に投せざるを得ざるなり。而も商工業が奢侈によりて撫育せらるゝ所に在りては、農夫は土地の合宜なる耕作に由り富裕にして獨立と爲り、他方に於て工匠及び商賈は財產の配分を取得し、公の自由に對し、最良且つ最堅實なる基礎たる、かの中層階級の人民に權威と尊敬とを導くなり。彼等は農夫の如く貧困と卑屈なる精神とに由りて隸屬の境涯に甘せず、又た貴族の如く他に對して壓制を行はんとするの希望を有せざるが故に、這般の滿足の爲めに其君主の壓制に服從することを欲せざるなり。彼等は其財產を確保す可き平等の法制を欲し、而して貴族的專制政治と等しく君主的專制政治よりも亦免れんとするなり(同 pp. 262-3.)。

下院は實に我が庶民政治の支柱なり、而して全世界は其主たる勢力と威嚴とをかの庶民の手に財產の平衡を與へたる商業の增進に負ふものなることを承認す。果して然らばそは技術の精鍊を非難すること頗る激烈にして、之を以て自由及び公共心を破壞するものなりと做すの思想と矛盾すること大なるものなり。現代に對する呪詛の辭を連ね、遠き祖先の德を過大に稱讚するは殆ど人間の本性に固

有なる傾向にして、開明なる時代の感情と意見とのみ獨り後世に傳はるが故に、從つて又た吾人は奢侈及び技術に對してすら之を非難する苛刻なる判斷に遭遇することと頗る多く、而して現在吾人は之に對して直ちに同意を表せんとする所以なるが、而も吾人にして一層不偏なる判斷を下し、一層能く其十分に知悉せる事態を對比し得可き當代の各國民を比較するに由りて容易に其謬妄なるを知覺す可きものなりし。（同 pp. 263-4.）。

四

Humeは次で、奢侈が無害たらざるに至りたる時は常に亦た有利たらざるに至るものにして、更らに其程度を進むる時は有害なる性質を有するに至る（恐らくは國家に取りて最も有害なるものに非ざる可しと雖も）ことを立證せんとせり。然らば不德なる奢侈とは何ぞ。如何に肉感的のものと雖も、滿悅は總て其自身に就きて不德と思料せらるゝこと能はず。一の滿悅はそが或る人の費用の全部を占め、其地位及び財產より推して當然行はざるを得ざる義務及び寬大の行爲に對し何等の財力を殘さゞる場合に限り獨り不德と爲るなり。彼にして不德を矯正し、其費用の幾分を其子女の敎育、其知友の扶助及び貧民の救濟に使用せりと想像せば、社會に對して何等の弊害を來すことなきなり。却つて同一の消費は起る可く、現今單に一個人に對して僅なき滿悅を生ずるが爲めに使用せらるゝ勞働は貧困者を救濟し、而して幾百人の上に滿足を與ふるなる可し。基督降誕祭に際し一皿の豌豆を生產すると同一の注意及び勞苦は六ヶ月間家族全般に對して麪包を供給するなる可し。不德なる奢侈なくんば勞働は全然使用せられざりしなる可しと稱するは、即ち懶惰、私慾、他人に對する不注意の如き、人間の本性に或る他の缺陷あり、之に對して奢侈は宛も一の毒藥が他に對しては解毒劑たり得ると等しく、幾分の救濟を與ふるものなりと謂ふに、等し。而も德は滋養に富める食物と等しく、如何に是正せられたりと雖も、毒物に優れるものなり（同 pp. 264-5.）。

地味及び氣候に相異なしとして現在大不列顚內に存すると同一の人類を想定し、想像せられ得る最も完全なる生活方法及び大自在力其者が彼等の氣質及び性向の中に行ひ得可き最大なる革新に由りて彼等は更に幸福と爲ること可能ならざるや。之を否定するは明かに烏滸の觀あり。土地は其現在の住民の全部以上

を維持するを得るが故に、彼等は嘗つて斯くの如き無何有鄕的國家に於ては肉體的疾患より發生するもの以外に何等他の不幸を感ずること能はざる可く、而して是等のものは人間の災厄の一半にも達せざるなり。あらゆる他の不幸は吾人自身若しくは他人の孰れかに存する或る不德より發出するものにして、吾人が疾病の多くすら同一の始源より生ずるなり。不德を除去せんか、不幸も亦た其後を追ふて去らん。汝は唯だ不德の全部を除去することを念とせざる可らず。汝にして其一部のみを除去せんか、汝は事態をして更らに凶惡ならしむ可し。怠慢及び他に對する冷淡を癒治することなくして、不德なる奢侈を排斥せんか、汝は單に國內に於ける工業を減少するのみにして人民の慈善及び寬仁に對し何物をも加ふることなかる可し。是に於て乎、吾人は一國內に於ける二個の相反する不德は孰れか其一方のみよりは有利なるを主張するを以て自ら滿足せんとするも、而も決して不德其者が有利なりとは斷言せんとせざるなり。かの Fable of the Bees の著者が其著に於て道德的榮譽は公共の利益の爲めに政治家の發明せるものなりと主張し、直ちに次の頁に於て不德は公共に取りて有利なりと固執するは甚しき前後撞著にあらずや。而して一般に社會に取りて有益なるものを一の不德と稱するは如何なる倫理の體系に據るも事實殆ど名辭の矛盾に外ならざるの觀あり。（同 pp. 265-6.）。

Humeは這般の推論を以て是迄で英國內に於て盛んに論爭せられたる哲學的問題に對し幾分の光明を與ふるが爲めに必要なりと思惟せり。彼は之を政治的問題と呼ばずして、哲學的問題と稱したり。即ち人類に對しあらゆる種類の德を賦與し而して彼等をあらゆる種類の不德より釋放するが如き其奇蹟的變化の結果は如何に大なりとするも、そは單に可能性のみを目的とする長官の任務にあらず。彼は一の德を以て之に代ゆるによりて有らゆる不德を癒治すること能はず。彼は一の不德を他のものによりて癒治するを得ること頗る屢々なり、而して其場合には彼は社會に取りて害惡の程度最も少きものを擇ぶ可きものなり。奢侈は過度なる時、幾多の不幸の泉源たるも、而も概して之に代つて來る可きを普通とし私人及び公共の兩者に對して一層有害なる無爲懶惰に優れるものなり。怠惰の支配する時、卑賤粗笨なる生活狀態は個人の間に行はれて社會なく、享樂なきに至ら

ん。而して若し斯くの如き狀態に於て君主が其臣民の勤務を要求せんか、國家の勞働は單に勞働者に對して生活の必要品を準備するに足り、公務に使用せらるゝ者に對し何物をも給與すること能はざるなり云々と。（同 pp. 266-7.）。（本項の文字は版本に據り幾分の相違あるも孰れも重大なるものに非ざるが故に今之を擧示せず）。

五

Bernard de Mandeville が The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits. の基礎を成せる拙惡なる英詩 The Grumbling Hive: or, Knaves turn'd Honest. は一千七百〇五年六片（ペニー）の小冊子として刊行せられ、而して幾許ならずして其僞版は半片紙（ペニー）として市上に呼賣せられたるものなり。（同書 Preface 參照）。次で一千七百十四年初めて前記の題目を以て An Enquiry into the Origin of Moral Virtue. 並に幾多の備考（Remarks）を附して刊行せられ、更に十五年二十三年及び二十五年と其版を重ぬるに從ひ An Essay on Charity, and Charity-Schools 及び A Search into the Nature of Society. 並びに A Vindication of the Book from the Aspersions contain'd in a Presentment of the Grand-Jury of Middlesex, and an abusive Letter to Lord C. を追加し、一千八百〇六年には其第十一版を出せり。而して彼は一千七百二十八年 Horatio と Cleomenes との六篇の對話（第一篇は Fulvia を加ふ）を以て其第二部として出版し、三十三年其第二版を出せり。（本書の出版年次は之を誤り記すもの頗る多し Erdmann の如き其著例なり。A History of Philosophy, vol. ii. 1897. p. 149.）。

彼が寓話中に描き出されたる蜜蜂は彼等が奢侈と不德とを有する間は彼等の小國家の繁榮を有するものにして、不德と奢侈とが德と質素なる生活とに道を讓るや、彼等は直ちに其幸運の全部を失ひて「滿足と敦厚とに加護せられつゝ空木中に飛び入るなり。（vol. i. 4th ed. 1725. p. 22.）。節儉は個人の家計をして富裕ならしむるも國家を窮乏せしむるものなり。彼は奢侈に定義して曰く、人をして一個の生物として生存せしむるに直接必要ならざる總ての物は奢侈なりと。之を事實に徵するに赤裸なる野蠻人の間に於てさへ、斯くの如き嚴格なる意義に於ける必要品に自己を制限せるもの此世に存するとなし。「萬人悉く這般の定義は嚴格に過ぐるものなりと主張す可く、余も亦た同一の意見を有すと雖も、而も余は吾人に

して若し斯くの如き嚴列の一時を減ず可しとせば、吾人は停止す可き處を知らざるに至る可きを虞るゝなり」。吾人にして若し一度び人間をして生存せしむるが爲めに絶對に必要ならざる一切のものを奢侈品と稱することなきに至らんか、奢侈品なるものは全然存せざると爲る可し。即ち若し人間の欲望にして無數なりとせば、從つて之を充足す可きものも亦た何等の限界を有せざる可く、而して前述せるが如き最も嚴格なる意義以上に出でたる、人間生活上の必需品中に計上せらる可きものは人々の地位に依りて自ら相異るを免れざる可し。（同、pp. 108-110.）。

奢侈は之を行へる各個人の富に對すると等しく國家全般の富に對しても亦破壞的なるものにして、國民的節約は宛も一身一家の節儉が各個家族の資産を增大すると等しく一國を富裕ならしむるものなりとは一般に是認せられたる總念なり。然もMandevilleは賢明なる施政を以てせば、全人民は彼等が生産物の購入し得る限り、多量の外國産奢侈品中に浸りながら、毫も之に由りて貧困と爲ることなく、而して軍備に對して適當なる注意を行ひ、兵士にして十分の支拂を受け、永く其訓練に於て遺憾なきを得ば、富裕なる國民は想像し得可き總ての安易と充實との中に生存するを得可く、而して其幾多の部分に於ては人智の案出し得る極限の華麗と優雅とを示すと同時に、其隣邦によりて畏怖せらるゝを得可しと主張せり。斯くてそは彼が其寓話中に

Flatter'd in Peace, and fear'd in Wars,
They were th' Esteem of Foreigners,
And lavish of their Wealth and Lives,
The Ballance of all other Hives.

と歌へる蜜蜂の地位に到達するを得るなり（前掲 pp. 110-123. 並びにMarks(M)及び(Q)參照）。

六

Humeは其書中に於てMandevilleの論旨を批評すること一再ならず。彼が其奢侈論中に於て其所論を駁擊せること吾人の既に述べたるが如し。彼は更にOf Benevoience (Essays. vol. II. An Enquiry concerning the Principles of Morals, sect. ii.) に於て曰く、奢侈即ち生活の快樂及び便宜に對する精錬は從來久しく政治上に於ける有らゆる

敗壞の根原にして朋黨、暴動、內亂及び自由の根本的喪失に對し直接の原因なりと想像せられたり。從つてそは一般に不德として看做され、有らゆる諷詩作家及び嚴肅なる道德家によりて朗誦演述せらる可き好個の對象たりしなり。斯くの如き精錬が寧ろ勤勉、都雅及び技術の增加に資することを立證し又たは立證せんと企圖するものは今や政治的情操と等しく吾人が倫理的情操をも新たに指導し、而して從來有害にして非難す可きものと看做されたる所のものを無害にして稱讚す可きものと說くに至れりと(前揭版 p. 216.)。Humeが功利主義的倫理は彼をして有らゆる奢侈を以て甚だしく不正なるものと思惟しながら、一般の福利に取りては頗る便宜なるものと看做し、現在の用語を以てすれば、倫理的に不正なるも經濟的に正なりと主張せるMandevilleが哲學者等の面を冒して擧示したる、經濟學及び政治學と德行との間に橫れる矛盾を解決するを得せしめたるなり(Bonar, Philosophy and Political Economy. 1893. p. 108. 參照)。即ちHumeに取りては奢侈にして有用ならんかそは決して不德に非ざるなり。

德行は理性に依るや若しくは感情の上に存するや。理性は單に言辭的及び實在的關係及び事實を確定するに過ぎず。而もそは稱讚す可き性質とは何等の交渉を有せざるものなり。何人と雖も、二を二倍すれば四と爲り、又たは熱氣が日光に次ぐの事實を稱讚し若しくは非難せんとする者あらざる可し。斯くの如き概念の混亂は倫理學者の所論の上にも亦た之を見るなり。即ち彼等は卒然として「在」より「當爲」に移るなり。而も倫理的判斷は一の行爲に依賴する總ての關係及び事實が提示せられたる後、這般の行爲に關する觀念を通じて一の感情が激生せらるゝまでは起ることなし。そは單に吾人が或るものを稱して善若しくは惡と呼ぶ其感情の發動せしめられたるに由るなり。倫理學は批判と等しく道德的感情の上に存す。隨つてShaftesbury伯(Anthony Ashley Cooper)及びFrancis Hutchesonの兩者は前者が德を以て美と對比し、而して後者が倫理的批判を德性(moral sense)より推論せる點に於て稱讚に値するものなり(Shaftesbury, Characteristics of Men, Manners, Opinions; and Times. 1711.; Hutcheson, Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue, 1720. 參照)。(然もHumeは彼等の謂ゆる「德性」の分析せられ得可き諸要素を闡明するに由りて、這般の「覺性」に由り倫理上の善惡を區別する其見解を排斥せり)。

斯くの如くして倫理的形質(善若しくは惡)は宛も感覺的形質が單に感覺的に知覺するものゝ見地よりして效力を有するが如く、感情を有するものゝ見地よりして獨り有效たるなり。Hume 曾ゝて Hutcheson に寄せたる一書中に曰く、「余は衷心よりして、貴下の意見に於ては感情に依りて決定せらるゝ德行が單に人間の本性及び人間の生活に關するものなりと做すの結論を導くを避け得たらんことを希望す。こは屢々貴下に對する反對論として提供せられたり、而して其歸結は頗る重要なり」。と(Burton, Life and Correspondence of David Hume, 1846, vol. i. p. 119.)。然れども是に由りて此等の形質は其重要の意義を奪はるゝものに非ず。兩者孰れも客觀的にして永遠なる關係を表示することなしと雖も、吾人は實際上感覺的形質と等しき確實性を以て倫理的判斷を適用するなり(特に Treatise of Human Nature. bk. iii. pt. i. sect. i. の外 Essays. pt. i. xviii. The Sceptic. 參照)。此點に於ても亦 Baruch de Spinoza と一致せる (Spinoza, Ethica, iv.) Hume は爰に德行を以て獨り理性のみより推論し、倫理的原則を以て永遠の眞理なりと看做したる倫理哲學者に對し確然たる反對の地位に立てるなり。斯くの如き見地は Locke の時代以後に於てすら猶ほ Samuel Clarke (A Discourse concerning the Being and Attributes of God, the Obligation of Natural Religion, and the Truth and Certainty of the Christian Revelation. 2 vols 1705-6.) William Wollaston (The Religion of Nature. vol. 1. 1724.)等によりて維持せられつゝありしなり。(Harald Höffding, A History of Morern Philosophy: A Sketch of the History of Philosophy from the Close of the Renaissance to our own Day, Eng. trans. vol. 1. 1900. p. 455. 及び前掲 Erdman, pp. 133-4.)

七

果して然らば第二に提起せらるる可きは如何なる感情が德行を發生せしむるやの問題なり。Hume が此問題に對する解答は主として前掲 An Enquiry concerning the Principles of Morals. Section V. Why Utility pleases. (Essays. vol. II. p. 245—.)に於て之を見出すを得可し。彼は自愛よりして倫理的稱揚を推定するの意見を拒否し、而して吾人は仁慈若しくは公正なる行爲が多くは吾人自身の上に間接に與ふ可き利益に就て思惟するが故に、是等の行爲を是認すと見做すの所論を全然否認せり。吾人が一の行爲を以て社會に取りて有用なりとして嘉納するの泉源は之を他に覓めざる可らず。而してそは實に同情と呼ばるゝ感情中に見出さる可きものなり。

吾人にして若し自利のみに依りて其判斷を指導せんか、吾人は決して價値に對する共同の評定に到達すること能はざる可し。「何人と雖も、他の幸不幸に對して絶對に無關心なるものに非ず。其幸福は快感を與へ、其不幸は苦痛を與ふ可き自然的傾向を有す。各人は悉く這般の傾向を自已の間に見出すを得可し。斯くの如き原則は、縱令ひ之が爲めに如何なる企圖にして行はれたりとするも、更らに單純にして普遍的なる原則に分解せらるゝこと恐らくはあらざる可し」（前掲 p. 253. note. p. 590.）。

他人の歡喜及び悲歎は全然吾人に快感及び不快を與ふることなき狀態に非ざるなり。Horace 曰く、人間の相貌は人間の相貌よりして微笑若しくは悲涙を借るゝ(Uti ridentibus arrident, ita flentibus adfient humani vultus—Horatius.) (ibid.)。他人の幸福を目睹するは其原因若しくは結果の何れに於けるを問はず、吾人の主張を更らに高遠なる邊に導くまでもなく、宛も日の光又たは耕耘の手を盡したる平野を眺むるが如く、內奧の歡喜及び滿悅を傳へ、他人が悲歎の情態は暗澹たる陰雲又たは落寞たる風景の如く、想像を蔽ひて陰慘なる憂愁を生ずるなり。而して這般の事實にして一度び承認せられんか、異論は既に排除せられたるものにして、而して人生の諸現象に關する自然にして自由なる解釋は爾後有らゆる理論的考究者の間に勢力を得可きを期待するを得るなり(前掲書 Sect v. Of Qualities useful to Ourselves. p. 277.)。是に由りて吾人が公正若しくは仁慈の行爲を尊重する倫理的是認は其社會に對する效用に基礎を有するものなり。即ち這個效用の知覺、即ち他の言辭を以てすれば是等のものが他人に對して與ふる快樂の知覺は吾人自身の裡に同情的快樂の感情を激生するが故なり。公正なる可き義務の感情は吾人が良心と稱するか、の或る人自身の行爲と倫理的稱讚若しくは非難との聯想より發生す。公正又たは仁慈を欠くは即ち自已を不快ならしむ可きものなり。然れども幸福は內部的自已是認なくんば不可能なり。斯くて苟も自已の安寧幸福に對し一定の愛重を有する者は總て有らゆる倫理的義務を履行するに由りて其最良なる報酬を見出すなる可し。(Huxley, Hume, 1902. pp. 237-8.—Collected Essays, vol. vi.)。

設令ひ公正を以て德として認識するの事實が最初よりして平和と安固とを享有せんとする各個人の必要に因由す可しとするも、仍ほ洽く諸權利を制規するの

利益は獨り一般人類及び社會を支持する所のものに對する同情を通じて説明せられ得るなり。一定の行爲に對して價値を賦與する第一の有德なる動機は其の後に於て吾人が判斷の基礎を成す所のものと同一なるを要せざるなり。一個人としての行爲者に取りて有利なるが如き諸般の德に對する愛重の如きすら同情に由りて最も好く説明せらるゝを得るなり。斯くて倫理的判斷は行爲者よりして傍觀者に移されたり。Locke が單に暗示せるに過ぎざりし這般の移動こそ實にHume が倫理學をしてそが他に幾多の接合點を有したる其先進者より區別せしむる新奇にして特殊なる要點たるなれ。吾人は常に想像の助けに依りて吾人自身の行爲にして若し他人に由りて行はれたりとせば吾人の心胸に快感を生ぜしむ可きものを是認するなり。洵に理性は行爲の目的たる「有用なるもの」に到達す可き方法を敎へ、而して是に由りて稱讃に値するものに導くものが自ら稱讃に値するが故に、縱し單に間接に止るも、そは倫理的判斷に於て共働するなり。而も吾人に對して何れを稱讃す可きやを示すものは同情にして、善と認められたるものは傍觀者に對して稱讃の快適なる情操を與ふる所のものなり。即ち標準は行爲者の快感なり、而もそは彼の投射せられたる若しくは反映せられたる快感なり。行爲者は彼自身の所爲に對する傍觀者の地位に其身を置き、而して彼にして若し行爲者に非ずして傍觀者たりと假定せば、そは彼に如何なる印象を與ふるやと自問するなり。斯くの如きものは實に吾人が該行爲を一個の獨立なる過程と觀ずして、性向若しくは性格の一表徵として看做す可き倫理的判斷の要件なり。而して判斷を下す者は欲情の博物誌に於て既に善及び惡たる可く立證せるものを其標準として採用するなり。（前揭 Erdman, p. 132., Bonar, pp. 108-9. 參照）。

彼謂らく、如何なる哲學的眞理と雖も茲に表明せられたるものよりも社會に取りて有利なること能はざる可し。そは有らゆる其純正にして最大なる魅力に於て德を表示し、而して吾人をして安易と親和と愛情とを以て彼女（德）に接近せしむるなり。幾多の神學者及び一部の哲學者が彼女を蔽ひたる陰鬱なる衣裳は脫落して、溫厚、情愛、慈悲、慇懃以外に何物も現るゝことなく、且つ又た相應なる期間を隔つるも仍ほ嬉戯及び悅樂を現すに過ぎず。彼女は無用なる峻酷及び嚴肅苦難及び克己を説くことなし。彼女は其單一なる目的が彼女の信徒及び全人類をして、

若し能ふ可くんば、彼等が存在の有らゆる時期を通じて快活且つ幸福ならしむるに存することを宣明す、又彼女は如何なる快樂と雖も、其生涯の或る他の時期に於て十分なる補償を豫期する以外に、決して好んで之を離隔することなし。彼女の要求する唯一の煩勞は、より大なる幸福に對する正當なる推定と堅實なる選擇とのそれなり。而して若し或る峻嚴なる窺察者、喜悅及び快樂の敵にして彼女に接近せんか、彼女は僞善者及び欺瞞者として彼等を排斥するか、若しくは之を其從者中に加ふるも、而も彼等は其信徒中最も寵遇薄きものゝ間に列せしめらるゝなり。而して實に一切の比喩的辭句を廢すれば、吾人は決して吾人が峻酷と嚴肅とを以て滿てるを告白せる常行に人類を繫ぐを得可き何等の希望を有すること能はざるなり。換言すれば如何なる倫理學上の理論と雖も、其推擧する義務の全部が等しく又た各個人に取りて眞個の利益たるを遂一詳細に示すを得るに非ざれば、決して何等有用なる目的に資すること能はざるなり。上に述べたる體系の特殊の利益はそが這般の目的に對し適當なる導體を供給するに在るものゝ如し。之を具有する者に取りて直接有用若しくは快適なる諸般の德が自利の見地に於て願はしきことは正に之を立證するの要なかる可し云々と。(前掲 Enquiry, Sect. ix. Conclusion. pp. 313-2.)。

八

而も尙ほ最も重要なる問題は吾人に殘されたり。上述せるが如き德の概念は吾人をして有らゆる德が公共の福利に趁くの傾向よりして、總て公共の福利に資するものは德を意味するものなりと論結するを許すや、公の利益は必然に私の德を包意するやの問題是なり。吾人は終にHumeよりして深く橫はれる倫理的危機及び障害に對する說明を聽くこと能はざるを遺憾とす。吾人の倫理性が其發達の進路に於て遭遇せざるを得ざる可き內外の障害は彼の注意を惹くことなくして終れり。Hutchesonは行爲者の意志が公共の福利より遠ざかれる場合には吾人は縱令ひ、事實上該行爲が公共に取りて有利なる結果を示せりとするも之を稱揚す可きものと看做すこと能はざるを知れり。(前掲 Enquiry, 4th-ed. 1738. PP 117-8)。

洵にBonarの所言の如く、Humeは其人も亦た同一の讓步を行はざるを得ざるなり。而も這般の讓步は縱し己むを得ざるに出づるとするも、彼がMandevilleに對する同

答に取りて致命的なるの觀あり。私の不德は公の利益たるとある可し、而もそは依然として不德たるの性質を改めざるなり。更に深刻なる反對論は前述せるが如き投射せられたる快感が何故に或る他の快感に比し吾人に由りて選擇せらるる可き更に大なる主張を有す可きやと云ふに在り、而して若し Hume の行へるが如く、私的效用は結局公のそれと一致するが故に、吾人の利益を意味するものなりと答ふ可しとせば、猶ほ錯誤の問題を殘すことと爲る。人が最善なる意志を以て公共の利益に對する行爲の歸趨を判斷するに際し其道を踏み過るとあるは爲政家の意見が相撞着するに徵して明かなる可し。彼は往々にして輿論其者が誤れるが故に、此點に於ける人民一般の意見と一致せざるとある可し。(前揭 Bonar, p. 109.)。

吾人は吾人自身の利益に關してさへ正當なる判斷を誤つことある可し。現在の犧牲は將來に於ける更に大なる利益を拋棄せしむることある可し。人は往々 Ben Jonson の歌へるが如く、一時間の快活なる狂暴を次で到る可き長き煩勞を以て購ふことあるなり (Jonson, Cynthia's Revels, act i.)。Hume は明白に人間が意識しながら自己の利益に反せる行動を爲す場合あり、最大可能なる善に關する見解は彼等を動すことなきを認めたり。彼曰く、有らゆる人が啻に彼等自身の利益を知悉す可き完全なる悟性を有するものとせば、協定に由りて樹立せられ、而して社會の各員に依りて十分に考査せられたるものゝ外、如何なる政體も決して認容せらるゝとあらざりしなる可しと(Essays, pt. ii. xii. Of the Original Contract. p. 441.)。德は目的にして、謝儀又たは報酬なく、單に其交付する直接の滿足に對し其自身の爲めに願はしきものなるが故に、其觸接する一定の情操、倫理的善及び惡を區別し、一を抱擁し、他を排斥する一定の內部的嗜好又たは感情若しくは人々をして其意の儘に之を呼ばしむ可きものゝ存するを必要となすなり。斯くて「理性」と「嗜好」との別個の境界及び善惡の情操を與ふるなり。一方は毫も增減を加ふることなくして事實自然及び職務は容易に確定せらるゝなり。前者は眞僞の知識を交付し、後者は美醜に存するが儘の客體を發見し、他は生產的能力を有し、而して內部的情操より借入れたる色彩を以て有らゆる自然の客體を修飾し又たは汚瀆するが故に多少新たなる創造を爲すものなり。(前揭 Enquiry, Appendix, sect. i. Concerning moral Sentiment. pp. 328-9.)。

「理性は冷靜にして解脫せるが故に、毫も行爲に對する動機たるものに非ずして、單に幸福を取得し、不幸を回避するの手段を吾人に示すに由りて物欲又たは性向より受けたる衝動を指導するのみ」。行爲は觀念に比し印象に由りて動さるゝこと少きものなり。一定の物欲は毫も快感の記憶の如き觀念に由ることなくして、吾人が其滿足より何等かの快感を感得するの以前に於て直接其對象に向つて吾人を推進せしめつゝある解明せられざる刺激に由りて行爲に移るものなること疑なき所なり。吾人は食欲を有し、而して之を食ふの快感を有せずして食物を欲求するなり。然れども是等のものは例外なり。人間が生涯の事務を處理し、此世を渡る一般の行爲は心眼の前に快樂の觀念を擧示すると相關聯せるものなり。嗜好は快樂又たは苦痛を與へ、而して是に由りて幸福又たは不幸を構成するが故に、行爲に對する動機と爲るものにして、又た欲望及び決意に對し第一の動機又たは衝動たるなり。既に知悉せられ若しくは想定せられたる事情及び關係よりして理性は吾人をして隱蔽せられて未だ知悉せられざるものゝ發見に導くなり。而して有らゆる事情及び關係が吾人の前に置かれたる後、嗜好は吾人をして全體より非難若しくは稱讚の新たなる情操を感せしむるなり。前者の標準は事物の本性に基礎を有するを以て外部的にして、神の意志に依るも尙ほ不撓なるものなり。後者の標準は動物の內部的構造及び組織より發するが故に、窮極各個の生物に其特殊の本性を賦與し、幾多生存の階級及び序列を整齊せる「至高の意志」より誘導せられたるものなり(ibid.)。

德行の基礎たるものは感情にして理性にあらず。而も理性のみ獨り吾人が行爲の結果を指摘し、是に由りて吾人が品行を指導するの力あるなり。此點に於てHumeはClarke及びWollastonと共通なる地步に立つ。吾人が奢侈の行爲を導きて一身一家より延きては全國家全社會の福利と一致せしめ、總ての經費をして悉く皆な滿足の餘剩即ち社會的富の創造に歸せしむ可きものは實に冷靜嚴肅なる理性の指導に依らざるを得ざるなり。

（一千九百十九年十二月稿）